



特定非営利活動法人 なんとなくのひろば 通信

URL <http://www.nantonakuno.net/>

Mail info@nantonakuno.net

NPO なんとなくのひろば 設立20年を迎えて

「不登校の子、発達障がいを持つ子、そして保護者が集い、子どもの立場で考え、交流できる場所を作りたい」と仲間が集まったのは2004年の春でした。

宇都宮で活動していた団体が運営するフリースクール、高根沢町教育員会が始めたフリースペース・ひよこの家、そして東京シューレ(王子)など、あちこち見学しながら相談を重ね、会を設立する準備を進めました。

3月には齋藤今市市長へ「子どもの居場所のため、報徳今市振興会館(*)を使いたい」との要望書を提出しました。会館の使用について今市市教育委員会と何度も打ち合わせを行った結果、使用が認められ、料金も免除という形で即決していただきました。会が動き出してから半年後、6月18日の金曜日午後、報徳今市振興会館での「子どもの居場所・なんとなくのひろば」がスタートしたのです。

NPO設立の手続きは順調に進み、10月24日設立総会、29日設立認証申請書を栃木県生活環境部文化振興課に提出。11月には今市市に「子どもの居場所」への補助金支援を要望し、居場所スタッフ手当の見直しもつきました。翌年の2005年2月 栃木県の認証を得て法人登記が完了し、活動を始める体制ができました。「子どもの居場所」をどんな理念で始めていこうか。市教委との打ち合わせで提示したのは次の3点でした。

- (1) 「学び」を保障する場である学校に通うことが困難になった子を援助したい
- (2) 不登校という現象にこだわらず、登校を強制されることなく、おだやかに過ごせる場をつくりたい
- (3) 多様な生き方を応援したい



クリスマスにあわせて立体折り紙も参加 いつものまにかフラーレン(C60)も20年間変わらない、これからも大切にしていきたい、私たちの理念です。不登校の子どもたちへの支援については、2016年「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」ができ、その中で「多様な学習活動に対する個々の状況に応じた必要な支援や環境の整備」、「不登校児童生徒に対する多様な教育機会の確保」が提唱されました。不登校の子にとっての最善の利益を探そうという法律です。求める支援は何なのか。どんな場所、どんな方法がよいか、子どもの学びの権利を保障するために、提案し見守り援助する支援をこの法律は求めています。すべての人たちにとって、学校、フリースクール、居場所などの「学びの場」が、より自由でより楽しい場所になっていきますよう、「なんにわ」も今までの経験を生かしながら活動していきたいと思えます。(手塚)

(*) 報徳今市振興会館は古い木造家屋で、日光市民活動支援センターおよび歴史民俗資料館・二宮尊徳記念館の敷地にありました。当時は市教委が管理し、見学やイベントで使用されていました。

子育て・親育ちの茶話会

場所：子どもの居場所（日光市今市316-4）

日時：毎月 第2月曜日（午前10時～12時）

次回の予定は電話でお問い合わせください。

参加費：300円（お茶代）

同じ悩みを持つ親御さん同士、気持ちを許し合って、情報や悩みを分かち合いましょ。 「一人で悩まず、みんなで！」を合い言葉に。
(Tel : 090-3227-7079)

目次

なんにわ設立 20 年	1
「県立高校再編」に関心を2	2
川むしたんけん（明神・行川）	3
活動報告	3
こんな本はいかが？・68	4



居場所のひとこま

12月25日はクリスマス会でした。メニューは定番のたこ焼きです。子どもたちも手伝いながら食欲を満ち、たこ焼き準備もゲーム対戦も大忙し。あっちのほうから聞こえる B'z や Beatles など、ちょっと懐かしい音楽が BGM でした。手作りパフェ(3ページ)もおいしくいただきました。今年も1年お疲れさま！

2 「県立高等学校再編」に関心を・2

▼ 前号のこの欄で、県教委から昨年1月に発表された「第三期県立高等学校再編計画」(高校再編)の内容をまとめました。日光市では、「今市高、今市工業高、日光明峰高」の3校が統合・再編され、現在の今市高が定員240人の総合学科高に再編されることになります。この3高校の歴史について少し調べてみました。今市高校のホームページには沿革年表があります。また、「日光所記」というページに詳しい情報が載せられ、参考になりました⁽¹⁾。

以下はこれらの3校の歴史を追ったおおまかな年表です。

1924～25年(大正13～14年)頃

今市市立中学校、日光町立高等女学校、
足尾町立実科高等女学校などが設立

1948～51年(昭和23～26年)頃

それぞれ男女共学の新制高等学校として開校

1964年(昭和39年) 今市工業高校創立

単独工業高:機械科・電気科・化学工学科の3科

2007年(平成19年) 足尾高等学校閉校

日光高に統合し日光明峰高として開校

それぞれの歴史を少し詳しく見ると、大正から昭和にかけて、実用的な教育を行う「実業学校」が作られ、そこを起点として、戦後1948年から数年の間に「新制高校」が再スタートした様子が見えます。注目されるのは、この時期に定時制および通信制が各校に作られていることです。今市高校では1949年に夜間定時制が設置され、10年間続きました。「通信制もあったよ」という話を聞いたことがあるのですが、今高のホームページには書かれていないので間違い情報のような感じです。もし日光での「通信制」についてご存じの方はお知らせいただければありがたいです。

▼ 県内の定時制課程の変遷については詳しい論考があります⁽²⁾。夜間定時制課程は中学校卒業後の子どもたちが「働きながら学ぶ」ために開校されたと聞いています。「学ぶ権利の保障」という新憲法の考えも反映しているのでしょう。戦後、農業関連の定時制課程が多く作られたようですが長くは続かなかったようです。今市高校の定時制課程も10年ほどで閉校になっています。その後1950年代に入り高度経済成長が始まりました。県内の各地で中卒労働者への需要が高まり夜間定時制があらためて注目される時代になったのです。栃木県の北部には自宅から高校への通学が困難な地域が多くありました。いっぽう宇都宮や安足地区では繊維関連企業などが中卒者の労働力を求めていました。県北の子どもたちを高校周辺の社員寮に住ませ、「働きながら高校卒業ができる」仕組みをとる地元企業の強い圧力もあったと聞いています。もちろん、経済的に高校進学が難しい子どもたちにとって、「働きながら学ぶ」ことができる学校の存在は「学ぶ権利の保障」として重要でした。しかしそれ以上に、県内各地の定時制高校は、それぞれの地場産業を支える労働者を維持するための役割を担っていたのではと思います。

▼ 1990年頃までの定時制高校にはクラスに数人は看護師志望の子が在籍していました。准看護師の資格を取るため、昼は看護学校または病院で勤務し、定時制高校へという生活でした。同じように、理容師をめざしてがんばっ

ている生徒も多かったのです。しかし理容師資格は高校卒業が必須となり、看護師や理容師は高校を出てからと変化したのがこの時期でした。他の職業でも正社員としての勤務は激減し、ほとんどがアルバイト。授業が終わる午後9時過ぎからコンビニの深夜営業シフトに向かう生徒も現れました。不登校の増加も目立ち始め、高校卒業を目指す子どもたちへの「セーフティネット」としての定時制・通信制が重要となってきたのも1990年代以降ではないかと思えます。「登校拒否」の女の子と「入社拒否」の父親との日常を描いた漫画『毎日が夏休み』(大島弓子・栃木県出身)が映画化されるなど話題になったのはこの頃です。

▼ 戦後50年の間の産業の変化、社会の変化の中で高校教育の定時制・通信制の立ち位置は変化してきました。両毛地区では繊維産業の衰退にともない、従来の定時制配置が見直されました。2005年、栃木駅の近くに県立学悠館高校が開校しました。小山、栃木、佐野、足利の定時制高校は閉校し(足利工業高は存続)、この新スタイルの高校に統合されました。「居場所」の利用者の中には、学悠館に進学し、東武日光線を通う子も出て来ました。今回の第三期再編計画には、2027年、宇高通信制の「フレックス・ハイスクールへの統合」が含まれます。宇都宮清陵高が募集停止となり、宇都宮市内の定時制普通科および通信制がこの「フレックス・ハイスクール」に再編されます。県教委発表の「高校再編計画書」を短くまとめると「宇都宮高校の通信制課程は2028年度末で閉課程、その時点で在籍する生徒は、2029年度から宇都宮と県北に新しくできるフレックス・ハイスクール通信制に転学」という段階を踏んで移行していくとのこと。

▼ 居場所に集まる子どもたちとスタッフで、宇高通信制や宇都宮市内の定時制を希望に応じて見学しています。定時制は夜遅くの帰宅、通信制は週1回のスクーリング通学が子どもたちにとって高いハードルに感じるようです。いまのところ、居場所からの県立定時制・通信制へ進学は実現していませんが、実際にJR日光線で通学し、学んでいる生徒は少人数ではないと思います。宇高通信制はJR鶴田駅から徒歩10分にあります。通信制課程がフレックス・ハイスクール(以下、FHと略)に移動すれば、JR宇都宮駅でLRTに乗り換え、「清陵高校前駅」で下車することになります。FH定時制への通学についても同様な困難が考えられます。高校再編計画書には「通信制高校については、スクーリング等に通学しやすい環境となるよう、学校の配置を見直す。また、協力校の設置などについて研究を進める」と書かれています。定通制は就学費用の点でも魅力です。今回再編される「新・今市高校」に通信制課程の設置、または「FH協力校」を加えるなどの対応は考えられないのでしょうか。「学ぶ権利の保障」という観点も含め、次回は「新・通信制」を構想し、今後の提案につなげられたらと思います。関心をお持ちの方、メールなどでご意見をお寄せいただければありがたいです。(次号へ続きます・手塚)

参考資料:
(1)日光所記 <https://nikkohistories.info/>

(2)栃木県内高等学校の変遷過程にみる定時制課程の役割

小林千枝子(作新学院大学人間文化学部)

Sakushin Gakuin University Bulletin No.10 2020.2

☆ 活動日誌

- 10月31日(木) 通信「なんとなくのひろば」第77号 発行
- 11月 5日(火) 第122回 理事会
- 11月11日(月) 茶話会(第139回)
- 12月 9日(月) 茶話会(第140回)
- 12月20日(金) 教育支援訪問(市教委・堀口さん)
- 12月22日(日) ベリー会(学習講演会「ひきこもりからの回復」第4回)
- 12月25日(水) 子どもの居場所・クリスマス会
- 12月26日(木) 居場所大掃除
- 12月28日(金)～1月5日(日) 子どもの居場所の冬休み
- 1月 6日(月) 2025年・居場所開始
- 1月 7日(火) 第123回 理事会
- 1月 8日(水) 教育支援センターとの連絡会(教育支援センターにて)

さくらそう関連 連絡会など

2024年度 日光市相談支援専門員連絡会

- 11月27日(水) 雑談会
- 12月25日(水) 訪問介護事業所説明会

2024年度 日光市障がい者自立支援協議会

- 10月10日(木) 第7回 ケース・事例検討会議
- 11月14日(木) 第8回 ケース・事例検討会議(さくらそう事例発表)
- 12月12日(木) 第9回 ケース・事例検討会議

研修会

- 12月11日(水) 高次脳機能障害支援養成研修 基礎研修

パ
ク
リ
ス
マ
ス
会
で
作
っ
た



下写真：行川での「川むしたんけん」実施場所

10月になって雨の日が多く、夏に伸びた草が増水で倒されおまけに水たまりも。写真手前の集場所から川まで、葛の長い茎に足を取られないよう注意しながら、みんな頑張って歩きました。



川むしたんけん 10月26日(土) 9:30~11:30

日光市明神地区を流れる行川の中井橋に集まり、総勢10人で川の中の生き物調べを行いました。以前もこの中井橋で行なったことがありますが、今回はその場所より50メートルほど上流です。この日の水面幅は5m、上流から流れ着いた砂や小石、30cm前後の石も川の中にあります。河原には柳など灌木が生えており、堤防近くには小規模ながら水の湧いている所も。天気は曇り、気温17.1℃ 水温15.8℃ 流速20cm/秒、水深10~15cmの所を小さな網と白い皿を使って川に入る調査には程よい条件の日でした。

虫の種類によってその場所の水質を知るこの方法は、子供から大人まで一緒になってできるのが特徴です。今回も山間部を通ってくる流れなので、予想どおり水質階級Ⅰ(きれいな水)から階級Ⅱ(ややきれいな水)の生き物が見つかりました。それぞれの種類は右表に記しましたが、多数のヘビトンボや大きなカワゲラ(3cm)やサワガニが網に入っていたのは嬉しいことでした。そして水質階級ⅢからⅣに当てはまる生き物は見つかりませんでしたので、この場所は水質階級Ⅰと判定できました。また、指標生物以外の生き物もかなり見つけ、特にトンボのヤゴの種類が多く見られたことも発見の一つでした。

水生昆虫(川むし)が面白いのは幼虫と成虫では姿が異なることです。成虫は空を飛んでいるので多くの人を知っていますが、幼虫の姿はほとんどの人が想像できないのではないのでしょうか。年に2回の「川むしたんけん」。私たちの身近な川で「川むし達」はしっかり生きています。小中学生の皆さん、そして父兄の方々にもこの川むし達の世界をぜひ知って欲しいと思います。日光市にはたくさん川の川があるのですから。次回も川で待っていますよ。

(塚崎庸子・今市の水を守る市民の会)

川むしたんけん・まとめ

河川名：行川(日光市明神 中井橋上流・左岸)

日時：2024年10月26日(土) 9:00AM

天気：曇り・ 気温17.1℃ ・ 水温 15.8℃

川幅：10m 水面幅5m

川底の状態：砂礫・10~30cmの石

見つけた生きもの

A 指標生物(環境省指定)

- 水質階級Ⅰ(きれいな水)に棲むもの
ヒラタカゲロウ ごく小型3匹、ヘビトンボ 大小8匹、カワゲラ 3cm1匹・小型2匹、サワガニ・1匹
- 水質階級Ⅱ(ややきれいな水)
ヒゲナガカワトビケラ、タニガワカゲロウ、カワニナ、コオニヤンマ、ヒラタドロムシ
- 水質階級Ⅲ~Ⅳ(汚い水)
見つかりませんでした。

※ 指標生物の種類から、この水質は【きれいな水】と判明

B 指標生物以外の生きもの

- 水生昆虫 シロタニガワカゲロウ、モンカゲロウ、カクツツドビケラ、ナベバタムシ
- トンボのヤゴ(幼虫)
コオニヤンマ、ミルンヤンマ、オニヤンマ、カワトンボ、サナエトンボ
- その他 カエル(種類不明だが、トウキョウダルマガエルか?)



私たちの活動目的：

日光市とその周辺地区に居住する子どもおよび青少年等に対して、学習や自立のための支援活動と地域への啓発活動を行い、社会に出た後も継続性のある、支援と学びの場を作り出します。

私たちの事業：

- ① 子どもたちの自主性および自立性を尊重した居場所の提供および学びの場の運営
- ② 子どもたち一人ひとりに対応した、新たなカリキュラムや学習内容の開発
- ③ インターネットなどのIT環境を活用した学びの支援
- ④ 教育についての相談や情報提供活動
- ⑤ 学校外で育つ青少年の自立に関する相談および就労を支援する活動
- ⑥ 自然環境の中での学びを作り出し、自然環境保全の大切さを啓発する活動
- ⑦ 障がいの理解および啓発に関する企画運営事業
- ⑧ 第二種社会福祉事業の相談支援事業経営

こんな本はいかが？ その 68

学力喪失 今井むつみ 岩波新書 2034 (2024年9月)

小中学生の多くが授業を理解できていないのではという調査分析の本。著者の専門分野は、認知科学、言語心理学、発達心理学。「記号接地」、「スキーマ」、「アブダクション推論」などなど、ふだんは出会うことのない術語が顔を出す、恐れず、ネット検索かChatGPTに聞けばよい。広島県教委と共同し、県内の小中学校で調査を行い、「たつじんテスト」を作り上げた。結果と認知科学によるアプローチがこの本に多数提示されている。小学生、中学生のグループに同じ問題を回答させた結果の比較など衝撃的であるが、個々のデータをここで示すのは、「じっくり考えながら読んでほしい」著者の本意に反するだろう。かわりに文中にある警句のほんの一部を挙げる。『「丁寧にわかりやすく説明すれば学び手に理解され、繰り返せば定着する」は教え手の持つ誤解である』、『子どもがつまづく原因として、「思考力そのもの」より「思考の制御の問題」が大きい』…。

「子どもの居場所」や「学びサポート」(現在休止中)の場で、分数計算が苦手な子に出会うことがある。受験があるのでやりなおしたいという希望もあった。「二分の一」や「三分の一」をどうわかってもらうか、分数の足し算で、なぜ「通分」という手続きが必要なのかを知らせたい。そのたびに折り紙、紙テープ、ピーカーに水を入れて体積で説明するなど、あれこれ工夫した。「分数」の問題について子どもたちと話しているうち、問題の中の数や記号の意味をうまく解釈できず、そのために混乱しているのではと思うことがあった。分数の計算が「わからない」子どもがどのように考え、分数を理解しているのかを想像することは難しい。限られた時間での対応なので、つい計算の手順を教え、子どものわからなさを解決しようとする。「わかった」と言ってもらえればうれしいが、はて、「わかった」とは何がわかったことなのだろうと、もやもやが残る。意味を考えず、記号をひたすら操作する練習を繰り返せば、分数の計算はできるようになるかもしれない。しかし、この本によれば、それは「記号接地ができていない」状態を放置した局所的な対症療法でしかないという。「認知科学」はこれからの子どもたちの学びにどう影響するのか。読むべき本だと思う。

この本に出合ったきっかけは、岩波書店「図書」(2024年12月号)で著者のエッセイを見つけたこと。以下のWebマガジンで読むことができる。

<https://tanemaki.iwanami.co.jp/posts/8471> (手塚)

会員について

正会員：50
賛助会員：13
団体会員：3

入会金なし

年会費(一口)
正会員 3,000円

賛助会員
個人 5,000円,
団体 10,000円



私たちの活動は会費と寄付金でまかなわれています。応援をよろしくお願いします。会員は新たな事業の提案、会の事業の運営に直接かかわることができます。積極的な参加をお願いします。

(カット:会員さん作成・消しゴムスタンプ)

なんとなくのへや

毎年のノーベル賞が話題になる時期、欧州原子核研究機構(CERN)からロシアやベラルーシとの協力協定を11月で終了するという報告がありました。全長27kmの円形大型加速器LHCによるヒッグス粒子の発見など、多数のノーベル賞級の研究成果を上げている研究機関での決定です■CERNは第2次世界大戦後、二度とあのような戦争を起こさないという祈りを込め、スイスとフランスとの国境に建設されました。それから70年、物質や宇宙の成り立ちを解き明かすことを目的に世界中から科学者や技術者が集まり、世界最大級の研究組織に成長しました。大型の加速器実験にはひとつの国ではまかないきれない多額の予算が必要です。ヨーロッパ各地のメンバー国と日本・インド・アメリカなどオブザーバとして参加する国がお金と人を分担し研究を進め、国際協力のお手本となっている組織でもあります■今回の評議会決定により、ロシアの研究所所属の400人を超える科学者がCERNでの研究ができなくなるそうです。ロシアは従来から重工業の強みを生かした加速器や粒子検出器に設置する大型電磁石で協力してきました。理論や情報処理分野でも大きな貢献があります。多くの実験グループが影響を受けるでしょう■CERN内部にも「関係を断つ」ことは研究機構の本義に反するとの意見もあり、学生や若い研究者を援助しなければという動きもあるようです。戦争は基礎科学の研究機関にも暗い影を落としています。(T)